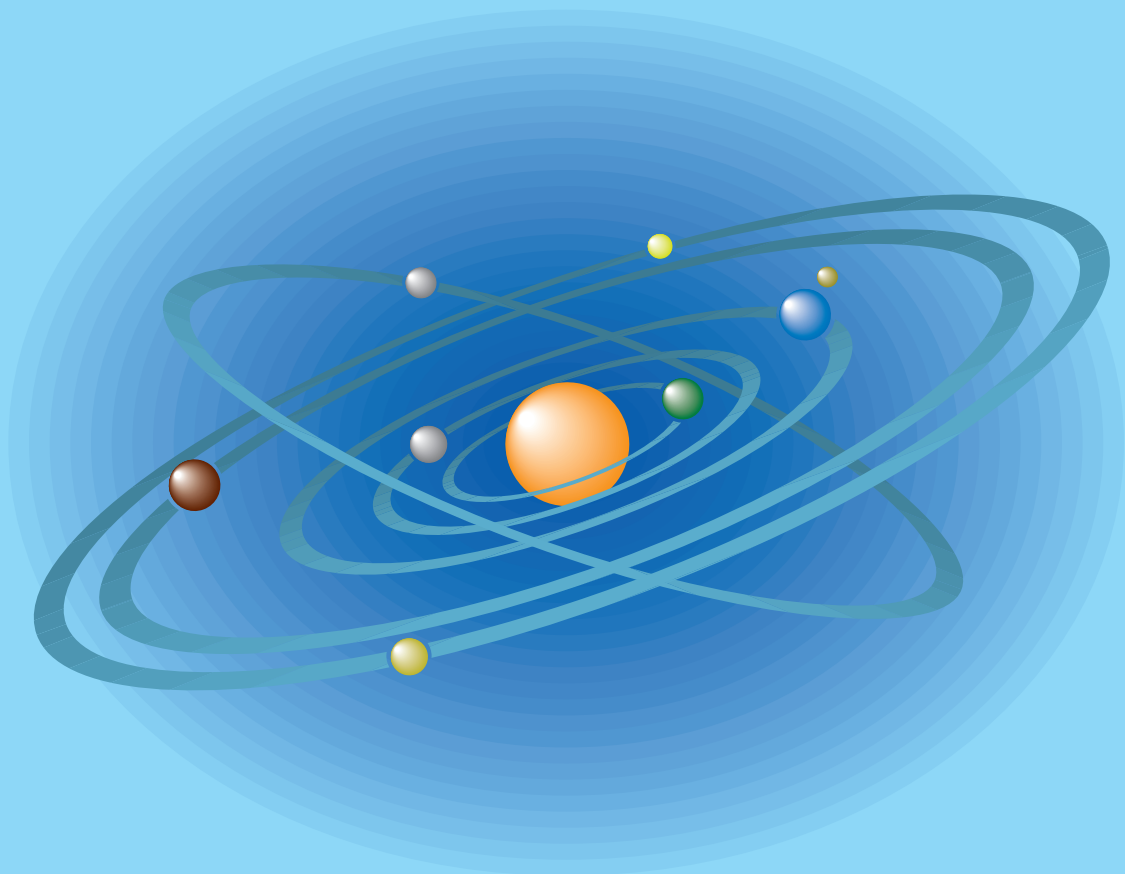


# じぶん、新発見

読み物シリーズ



## 「ネパールからの手紙」

お元気ですか？ わたしはこの冬休みにネパールという国を訪れています。ネパールはインドと中国に国境を接する国です。そしてネパールと中国との境には、エベレストをはじめとするヒマラヤ山脈があります。

わたしたちはエベレストにこそ登りませんが、ネパールの地方の町を出発して、美しいヒマラヤ山脈がパノラマのように見えるハイキングルートを何日もかけて歩きました。

そして今日はネパールの首都、カトマンズにいます。カトマンズは不思議な姿かたちの寺院がたくさんある町で、サリーという民族衣装を着た女の人たち、お土産や果物を売る物売り、それに世界中から来た観光客が行き交うにぎやかな町です。



ビデオ 第2巻

「ナマステ！ ダンプスの子供たち」より

ネパールは美しい国なので、観光収入もあるのですが、ほかに主だった産業はなく、この国の多くの人は村で農業をしています。近代的な農業とは違い、自分たちの食べるお米を作ったり、山羊を飼ったりして、いわば自給自足の生活をしています。わたしたちは山登りの途中、そんな暮らしをしている小さな村を訪れました。村の中心には学校があります。やっと十年前ほど前に、日本からの援助を得て建てられた学校です。学校ができる前には、このあたりの村の子どもたちには勉強ができる場

がなく、また現在もまだ、そうした村が多くあるそうです。

勉強に必要なノート、鉛筆さえ十分にあるとはいえないけれど、勉強の中身はわたしたちと同じです。わたしは村で同い年の男の子と、言葉が通じないのにすぐ仲良くなりましたが、それは男の子が、難しい因数分解の宿題を見せてくれ、それを一緒に考えて解いたからです。

男の子は自分の家にわたしを案内し、飼っているにわとりや山羊を見せてくれました。家畜の世話するのは彼の役割と決まっています。お父さんは、観光客の多い冬のあいだ、山のガイドをしていて家を空けるので、彼は家のただひとりの男手として、いろいろな用事をしなければなりません。

わたしは、将来は何になりたいのかたずねてみました。彼は医者になりたいのだそうです。この村には医者がいないため、村の人たちがとても困っている。両親を助けるためにもたくさん勉強して、この村のお医者さんになりたいということでした。わたしは自分の将来の夢のことは、はぐらかしてしまいました。

「村に医者がいない」という男の子の話の意味を実際に思い知らされることが起こったのは、その夜のことでした。

わたしたちが夕食を食べていると、村の村長さんと、サリーを着た、わたしと同じ年ごろの女の子が来て、ネパール語のできるガイドの前田さん呼び、深刻な面持ちで話しはじめました。その人の五才になる妹が高い熱を出し、ひどく苦しんでいるらしいのです。

前田さんは彼らについてすぐに出かけていきました。

一時間ほどたって、戻ってきた前田さんが、くわしく話をしてくれました。それによると、村



ビデオ 第2巻  
「ナマステ！ ダンプスの子供たち」より

の近くには急病人やけが人が出たとき、すぐに助けを求められる病院がありません。熱を出した女の子には、前田さんが用意していた解熱剤を飲ませ、お姉さんたちが看病し、夜明けになるまで様子を見るしかないのだということでした。もし朝になってもぐあいが良くならなければ、病院がある大きな町まで、病人を背負って何キロも険しい山道を下らなければなりません。

わたしはくたびれているのになかなか眠れませんでした。

昼間会ったこの村の中学生には、自分の家族の役に立ちたい、今の生活をもっと良くしたい、村のお医者さんや先生になるためにいっしょうけんめい勉強したい、という強い目標と意志があるように思えました。でも、わたしにはこれまで何かに不自由した経験がほとんどありません。お医者さんがいないとどれほど困るのか、骨身にしてみte感じたことも一度もありません。そして毎日学校に通いながら、目的に向かっていっているというよりは、教えられることを覚え、少しでも成績を上げることだけでせいっぱいです。

社会のなかで必要とされていると感じるより、競争社会を生き抜くことばかりを考えている、そんなわたしたちに比べて、物質的には豊かではなくても、こんなに美しい村の中で自分が必要とされ、目標をもって生きることが出来る人たちのほうが幸せなのかも知れない、と考えるようになりました。

次の朝、外にでてみると、すがすがしい景色のなかで、昨夜のお姉さんがいて、前田さんに

お礼を言っているところでした。妹さんの熱は下がり、落ち着いているそうです。

「こんなことが村ではたびたび起こります。彼女は、昨夜の妹さんの看病で、医者がこの村にどんなに必要かを痛感したそうです。医者になるにはお金もかかり、たいへんですが、いま保健婦を養成するための学校を建てる計画が、日本のボランティアとの間で進んでいるそうです。それが一日も早く実現して、そこで学んで、村の保健婦になりたいということですよ。」

わたしは、うれしそうに話す女の子の表情を見ながら、「はっきりとした目標を持っているあなたたちはりっぱだし、うらやましい。」と、昨夜から考えていたことを口に出しました。

女の子は、わたしの話を聞くと、こう言いました。

「教育を受けられなかったり、病気の手当てを受けられなかったりすることは、自分だけからも期待されていないし、必要とされてもいない、つまり、自分には生きるかいないと言われているようなものではありませんか？ 家族や村の人にこれ以上そんな思いをしてほしくない、というのがわたしの願いです。」

わたしはその言葉の意味を考え、なぜ彼女や昨日の男の子が強い目標と意志をもてるかが、なんとなくわかってきたように思いました。

それは、医者や保健婦になりたい、という目標の向こうに、みんなが人間らしく生きていけるようになりたいという、もっと大きな目的があるからではないか、ということなのです。

わたしは日本に帰りますが、これから、わたし自身の目標や、生きていく目的について考えよう、と思っています。

# 「タイ・スラムの人たちとボランティア」

## 大都会・バンコクのスラム

タイの首都・バンコクには千以上の「スラム」と呼ばれる人口密集地があるといわれる。近代的なオフィスビルが林立する中で、スラムは粗末な住居が雑然とひしめき合い、そこに住む人たちが、衛生面でも、文化面でも劣悪な環境に置かれていることがうかがえる。

スラムに住む人たちの多くは、もともとタイの農村部で農業を営んでいた人たちだ。

タイでは、経済発展が進むなか、農村でも近代的な農業を進めようとした。けれども、多くの人たちが近代的な農業に乗り遅れたり、乱開発や、木材を売るための乱伐で森林破壊が進み、土地が荒れてしまったりしたことで、農業や林業で生計をたてていくことが出来なくなってしまった。このため、生活の糧を求めて農村を捨て、都市へと流れ出てきた人たちがスラムに集まった。

スラムに住む人たちは、よい職業につくための技術を身に付けることが出来ず、貧しい生活を送っている。子どもたちに教育を受けさせる余裕もない。シンナーや麻薬に手を出したり、犯罪への道に巻き込まれたりする子どもたちも多くなった。

こうしたスラムの生活を改善しようと、地元のタイ人や、日本人のボランティアによる地道な活動が続けられてきた。収入を得られる技



ビデオ 第3巻「チーコの奮戦記」より

術を身に付ける職業訓練をしたり、子どもたちがきちんと教育を受けられるよう、大人たちに訴えたり、寄付金によって経済的に援助をしたりしている。さらには、子どもたちの精神的な支えにもなるなど、スラムの人たちが自立していくための、多くの手助けをしてきた。

こうした活動によって、スラムに住む人たちも、生活を改善していくために積極的な努力をするようになっていった。

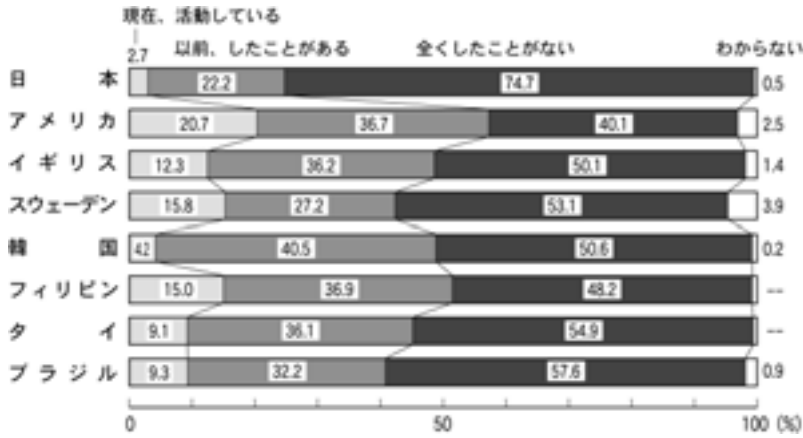
## 大震災で立ちあがったスラムの人たち

そんななかで、日本のボランティアの活動家が、こんなエピソードを伝えている。

一九九五年、日本で阪神大震災が起こった。このニュースはバンコクのスラムの人たちの耳にも届いた。するとただちに、「自分たちには出来ることはないか。」という声上がり、地域をあげての募金活動が行われたという。

スラムの人たちに「ボランティア活動をしたい」と言われたとき、ボランティアのその人ははじめ、「ちょっと待ってください、あなたたちも大変でしょうから、お気持ちだけで十分です。」と答えたという。けれども、「日頃から援助を受け、世話になっている日本の国の人たちにせめてもの真心をおくりたい」というスラムの人たちの思いは強く、結局、百十二万バーツ、日本円で四百五十万円という募金が集められ、日本人ボランティアの手に託された。おばさんたちは市場でマイクで募金を呼びかけ、学校では子どもたちも、一バーツや五バーツの硬貨を持ち寄った。なかには「わたしたちも、これまで地上げ屋から立ち退きを迫られたり、放火されて大火事にあったりしたから、神戸の人たちの気持ちがよくわかる。決して生活に余裕があ

## ボランティア活動の経験（各国比較）



総務庁青少年対策本部「第6回世界青少年意識調査」より

るわけではないけれど、日本の人々に真心を伝えたい」と言って、一日分の給料を差し出した人もいるという。

こうして集められた募金は、日本の金額にすれば大きくないものだとしても、スラムの人たちの日々の生活を考えたとき、その重みがどれほどのものかを感じずにはいられない。「日本は世界一物価が高いんだ。俺たちのはした金じゃどうにもなんねえかもなー」と言いながら、スラムの人たちは精いっぱい気持ちを伝えるため、勇気をもって立ちあがったのだった。

### ボランティアから生まれる新しい価値観

このようなエピソードから、わたしたちはどんなことを感じるだろうか。

これまで国際ボランティアというと、もっぱら日本のように経済的に豊かな国が、貧しい国に対して援助をする、ということかたちでとらえられてきた。

タイのスラムの人たちがボランティア活動として日本のために募金集めをした、ということとは、これまでのとらえ方からすると、まったく新しいこと、驚きを覚える出来事としてわたしたちの目に映るかもしれない。いったいボランティアとはなん



だろう、わたしたちはあらためてそんな問いに出会う。

タイの大都会バンコクのスラムに生きる人たちは、もともとは豊かな自然のなかで農業を営んできた人が多い。しかし、工業化のために自然破壊が進み、言われるままに森林を伐採して売り払ってしまったために、かけがえのない豊かな大地を失ってしまった。こうして都市に集まった人たちは、ある意味で、急激な経済成長によって生まれた犠牲者といえるかもしれない。

もちろん「先進国」と呼ばれる日本は、率先して物質的な価値を追及してきたのだ。そうしたなかで、タイのスラムの人たちは、そのような価値観に負けず、お金だけではない、別の大切なものがあることをわたしたちに示してくれているのではないだろうか。

ボランティア活動は、お金もうけのためのものではない。むしろ、お金ではないもの、自分のもっている力や、時間や、労力、そして役に立ちたいという気持ちをほかの人たちのために提供しようとするものだといえる。

日本でも、物質的な価値ばかりを追い求めてきたこれまでの時代を振り返り、反省しようとする、新しい時代を迎えつつある。これまで、社会の在り方は、お金による「もの」のやりとりだけですべてが片づくと思われていた。けれども、今、わたしたちの生活には、お金のやりとりだけではなく、「こころ」を中心としたかわり合いが必要なのだということを、実感するようになってきた。だから、ボランティア活動はこうした「こころ」のかわり合いをつくる新しいしくみとして、社会の中に取り入れられつつある。

こうしたことがボランティア活動の本来の意味だとすれば、タイのスラムの人たちの活動は、まさにボランティアのいちばん大切なことを示してくれたものなのではないだろうか。

# 「ボランティアってなんだろう」

## ＊ボランティア活動の提案

今度の三年生の学年会議では、学級活動について話し合うことになった。この学校でも、なにかボランティア活動をしよう、という生徒会の提案がでたからだ。

今日のホームルームでは、クラス内で、やってみたい活動の案をまとめることになっていた。クラスの人たちの意見はあまり積極的な感じではなかった。

「空き缶を集めて、海外への寄付金を作ろう」というものや、「老人ホームを訪問して合唱をひろうする」といった案が出るには出たのだが、

「それって、役に立つのかなあ。わたしたちの下手な歌をきかせたら、迷惑なんじゃない。」

「空き缶を拾うのはいつするのか。部活がある人はいそがしくてできないと思う。」

といった反対意見が出されると、提案した人の答えも頼りなかった。

そのうち、

「なんか、空き缶拾ったりしたらわざわざらしいよね。」

「やりたい人だけやればいいんじゃないの。」



ビデオ 第12巻「空き缶が夢を広げる」より



という意見まで出て、話し合いは勝手なおしゃべりのほうへと流れ始めた。

すると、それまで教室のうしろのほうで、だまって話し合いを見ていた先生が、考え込むように腕組みをしたまま、ぼくたちにいきなりこうきりだした。

「きみたち、ところで、ボランティアってなんだ？」

＊ボランティアってなんだ？ 先生の話

「ボランティア」ってなんだ？ と聞かれたら、きみたちはどう説明する？ もともとは日本語ではない、カタカナで書かれた外来語だから、ひとことで意味を説明するのはむずかしい。

「ボランティア」ってことは自体は、ぼくたちの生活の中でもよく聞かれるようになったよね。一九九五年に起きた阪神大震災の時は、たくさんさんのボランティアが活躍したし、日本国内にはたくさんさんのボランティア団体があって、海外へボランティアを派遣したり、お年寄りの介護を手伝ったりしている。でも、ぼくたちがそういう活動に加わるには、なんとなく敷居が高いような気がするの、確かだと思う。三年生は勉強も忙しくなるしね。

そういう中で、きみたちの中から、空き缶拾いや、老人ホームの訪問をしたいといった意見が出てきたことは、先生としてはすごく評価できることだと思った。せっかく生徒会から積極的な提案が出

たんだし、忙しくて、ほかにやることがいろいろあるのはたしかだけど、小さいことでも、みんな何か実現できたらと思う。

それで、まずは、話をうんと小さくしてみようと思って、「ボランティアって何なんだ。」と、きみたちに聞いてみることにした。

### \* 「ボランティア」の意味

だれか国語辞典を持ってるか？ そうしたら、ボランティアのところを引いて、読んでみてくれないか。

ボランティア：自分から進んで社会事業などに奉仕すること。

ボランティアはまず、「自分から進んで」することのようだ。

次に「社会事業など」をすることのようだ。

最後に、それをすることを「奉仕する」というらしい。

「社会事業」や「奉仕」のような言葉がでてきた。ピンとこなかったら、こういう言葉も引いてみるといい。

意味がつかったか？

ボランティア：自分から進んで、「公衆の福利を増進するための、組織的活動に

よる事業」などに、「国家・社会や目上の者などのために、

私心を捨てて力を尽くす」こと。

うーん、こういうときには、奥の手というものがある。それは「ボランティア」は外来語だから、英語の辞書を引いてみることだ。

先生が持っている「英和辞典」を引いてみよう。

「volunteer」は「志願者」という名詞を意味するらしい。それから「志願の、有志の、自発的な」という形容詞の意味が続いている。

「ボランティア」は「ボランティアする」という動詞でもある。「自発的に申し出る、進んで提供する」という意味があることがわかる。

さて、そうすると国語辞典で引いた「ボランティア」の意味のうち、「社会事業など」と「奉仕する」はさておいて、「自分から進んでする」ものだけのことだけは、はっきりした。ボランティアっていう言葉は、そもそも、「自分から進んでする」というだけの意味なんだ。ほかにはなんの決まりもない。何をするかも、なんのためにするかということもだ。

そこで、ぼくたち流ボランティア活動を、名付けて「自分から進んでする活動」として、きみたちが、ふつ々の生活の中でどんなことができるか、考えて、まず何日かを過ごしてみたらどうだろう。

「自分から進んでする」ことなら、いろいろあると思う。明日の予習をしたり、おかしを食



べたりするのもそうか、ということになるけど、とりあえず、「ボランティア」にもう一歩近づくために、自分のことだけではなく、ほかの人にかかわりのあることをする、という条件をつけよう。

ボランティアに決まりはない、といったけど、決まりがないことをすることって、かえってむずかしいことかもしれないよな。

### ＊震災ボランティアに学ぶ

たとえば、さっき例に挙げたボランティア活動の中で、阪神・淡路大震災の例がある。あの時、たくさんのボランティアが被災地につめかけたけど、混乱の中で、多くの人には、「それじゃ、あれをやってください。」という指示を出してくれる人もなくて、はじめはとまどったそうだよ。それで、自分たちでとにかく歩いて、何をすべきなのかを探して回ったんだそうだ。

すると、地震によって、どんなことに困っているか、どんな助けを求めているかは、人によって本当にそれぞれだ、ということがわかった。がれきの中から、大事なものを探すのを手伝ってほしい人とか、忙しいあいだこどもの面倒

を見ていてほしい人とか。でも、ボランティアの人たちは、自分で何をできるかを探して回ったことで、本当に役に立つことができたんだろうと思わないか。

ボランティアとして被災地を訪ねた人ばかりではなく、もちろん被災地に住んでいて被害を受けた人たちの間でも、励ましあったり、助け合ったりした。その人たちは、震災をきっかけに、助け合ったり、喜びや悲しみを分かち合ったりする気持ちが強まった、という感想をもったという。

それほど大変な状況の中に置かれるのでなくとも、日常の中でふと気づいて、進んで役に立ちたいと思ったり、役に立ってよかったと思ったり、そういう経験をする機会はたくさんあると思う。そういうときの気持ちと、はじめに生徒会から提案が出たボランティアが重なるようになればいいね。

### \* 「自分から進んでする」ということは 生徒の感想

「自分から進んでする」ということを実行してみよう。

先生からそんな話があった日の放課後、わたしは塾に行くために電車に乗った。

空いた座席を見つけて座っていると、赤ちゃんを抱いた女の人に乗って来て、わたしの前に立った。

その女の人は、同じ年ごろの女性と一緒だった。女の人に席をゆずろう、と思いはしたものの、わたしがタイミングを逃してしまっていると、二人の女の人はおしゃべりを始めた。



「赤ちゃん、重たいでしょう。」

「平気よ。」

赤ちゃん、重たいだろうな、と思ったけれど、いまわたしが席をゆずるために立ったら、二人の女性がしゃべっているところに割って入るようで、気が引けて、結局わたしは降りるまで、席をゆずることができなかった。

「どうぞ。」と言って立つだけのが、わたしにはなぜできなかったのだろう。「自分から進んでする」を実行する絶好のチャンスだったのに。

わたしは、席をゆずることのできなかったあの気まずかった時間のことをしばらく思い悩んだ。そして気づいたことは、「自分から進んでする」ということは、どんな小さなことでも、わたしがひとつの意思表示をすることになるのではないか、ということだった。

わたしが「どうぞ」「といて席をゆずれば、相手は「どうもありがとう。」と返事をする。ほんの短い間だけれど、見ず知らずの人との間にひとつのつながりが生まれる。「自分から進んで」席をゆずる、ということとは、それを意図しなくても、そのつながりをわたしの方から進んでもとうともちかける、ということになるのではないか。

ひょっとして、あの女の人が一人だけで電車に乗ってきたのだったら、わたしはためらわずにすぐ席をゆずることができたのかもしれない。仲良さそうにおしゃべりをしていた二人の女



の人のようすが、わたしの気持ちを少しくじけさせたのかもしれない。

こんなことを思い悩むなんて、考え過ぎかもしれない。でも、クラスの中でも、なにかを「自分から進んでする」ということは、わたしが、「自分から進んで」クラスを良くしたい、クラスの人の役に立ちたい、という意思表示をしていることになる。それがなんだか、気はずかしいことのような気がする。

それからもう一つ考えたことは「自分から進んでする」というときには、必ずしも「助けてください」とか「これをやってください」と向こうが口を開けて待っているわけではない、ということだ。

「自分から進んでする」ということは、自分から進んでちょっとずつ、自分といろんな人のつながりを作っていくことだ。でもそれは、やっぱり少しの勇気が必要とすることなのかもしれない。

## じぶん、新発見 読み物シリーズ

監修：押谷 慶昭 埼玉短期大学教授

---

2001年4月1日 発行 定価 2,500円（消費税別）

発行所 株式会社ソーケン

〒140-0001 東京都品川区北品川1-14-1

TEL 03-5479-5595 Fax 03-3474-5160

<http://www.sokennet.co.jp>

E-mail ; [request@sokennet.co.jp](mailto:request@sokennet.co.jp)

---

転載・複製を禁ずる

本書に関するワークブック、教材類の作成、頒布を禁ずる